

海上に抱いた志 — 起業者としての坂本龍馬 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也



坂本龍馬

三菱財閥の創始者である岩崎弥太郎の視点から坂本龍馬の生涯を描いた2010年のNHK大河ドラマ『龍馬伝』で福山雅治の演じる龍馬が西郷隆盛に次のように語るシーンがある。

「西郷さん、わしら侍もつまらん意地らあ捨てて、長崎の商人を見習わんといかんがじゃないろうか」

倒幕という目的では一致しながらも文字どおり犬猿の仲だった薩摩と長州の歴史的な薩長同盟を迫った科白の一部だ。土農工商に象徴される封建制度の転覆に奔走した龍馬はたしかに來たるべき時代の姿を商人の姿と重ねあわせていた。勤王の志士という枠組みに収まらないスケールの大きさをそこに見ることができるだろう。

会社組織の亀山社中＝海援隊

武士としての龍馬のルーツをたどると、もとも

と土佐藩の下級武士である郷士＝下士の身分は曾祖父が金銭で買い取ったものだった。本家の才谷屋、親戚の下田屋は廻船を所有し、各地の物産を売買する豪商で龍馬の商人気質に少なからず影響を与えたことはまちがいない。

当時の土佐藩は上士と下士で身分に雲泥の差があり、着物や日用品に至るまで区別されていた。そんな理不尽な悪習に龍馬が馴染むはずもなく、文久2年（1862）に脱藩して幕府の重鎮である勝海舟の門下生となる。貿易と海軍の確立によって西欧諸国からの独立をめざすという勝の教えを受けて龍馬は幕府直轄の神戸海軍操練所設立の中心的役割を果たす。

慶応元年（1865）には長崎県の亀山に株式会社の元祖といわれる亀山社中をつくり、海外の商人から武器や物資を買いつけて薩長に売る近代的な海運・貿易事業を手がけた。同時に亀山社中は反幕府の政治結社として慶応2年（1866）の下関における対幕海戦に参加し、長州の軍艦ユニオン号に乗り込んで幕府軍と戦ったりした。

貿易商社としての亀山社中では出資者が資金を出し、龍馬を筆頭とする経営陣が事業を運営する<資本と経営の分離>が行われた。龍馬は資金を借りるのではなく収益の一部を配当すると福井藩主の松平春獄に働きかけ、まさに投資家として出資させたという。

しかし亀山社中は海難事故などで経営困難に陥り、慶応3年（1867）に土佐藩が営む土佐商会と合併し、新たに海援隊として生まれ変わる。現

代のM&Aの先駆けとっていいだろう。

海援隊は運輸、開拓、投機などを目的に掲げ、土佐藩や他藩の脱藩者を問わず海外に進出する志のある者は自由に入隊させると規約に明記した。隊士が働きながら航海術や政治学や語学を学べる一種の学校でもあった。

ちなみに土佐藩の貧しい浪人の息子として生まれ育った岩崎弥太郎は会計係として将来の足がかりを築いた。身分ではなく志の高さを問う龍馬の姿勢は既成の観念・因習・制度を打破しようとする先進的な起業者としての意識を示している。

経営的手腕による薩長同盟

龍馬の卓越した経営的手腕は慶応2年（1866）の薩長同盟締結の際にもいかに発揮された。それ以前の薩長は共に徳川幕府の有力な対抗勢力であるにもかかわらず武力衝突を含めて感情的な対立を深めていた。もはや尊王攘夷という理想論だけで両者が和解する余地はなかった。そこで龍馬は薩長同盟によってそれぞれが得をするという実利的な提案を行う。

龍馬は薩長が抱える深刻な内部事情に着目した。薩摩の場合は兵糧米の調達に苦慮しており、一方の長州は幕府を凌駕する最新兵器を揃える必要があった。

双方のニーズを充たすために龍馬は薩摩名義で調達した武器・弾薬を長州に売り、その見返りとして長州から薩摩に兵糧米を送るよう提案する。しかも運搬は龍馬が担当することによってみずからも利益を得る。まさしく商人としての発想だ。

商人としての龍馬をクローズアップした津本陽の時代小説『商人竜馬』では龍馬の稀有な商才を次のように評価している。

「龍馬が奇禍に遭うことなく、明治期を迎えておれば、岩崎を凌ぐ商才を発揮していたであろう。龍馬の合理的で争闘を好まず、常に社会の変化を把握しようとする心がけた性格は、武士のそれではなく、あきらかに商人のものであった」

船中八策の示唆するもの

龍馬は最晩年の慶応3年（1867）、盟友の後藤象二郎と長崎から兵庫へむかう船上で倒幕後の新体制の基本方針となる船中八策を起草した。京都に上洛していた前土佐藩主の山内容堂に大政奉還論を進行するために後藤に対して口述したものを海援隊隊士の長岡謙吉が書きとめて成文化したと伝えられている。

なかでも議会政治の必要性を唱えた「上下議政局を設け、議員を置きて万機を参賛せしめ、万機宜しく公議に決すべし」という第1項が有名だ。これは明治政府の基本方針として慶応4年＝明治元年（1868）に布告された五箇条の御誓文の第1条「広く会議を興し万機公論に決すべし」などに影響を与えたといわれている。

船中八策で訴えた万民に開かれた議会の開設は土農工商に象徴される封建的な身分制度の廃止を意味していた。同時にそれは武力ではなく平和的な話し合いを通じて諸事万端を決めていくという議会制民主主義の萌芽でもあった。

天性の商人的感覚をそなえていた龍馬にとって政治と経済は常に一体のものであり、血で血を洗う政争が経済を発展させるうえで致命的な障害となることを痛感していたのだろう。武力による薩長の倒幕方針に同意せず無血革命を望んだのも、流血は無益という商人としての感性が根底にあったからだ。

近代的市民社会の指標となる自由・平等・平和という核心的概念を龍馬は商人の発想に基づいて明確に把握していた。経済を安定して発展させるには自由・平等・平和という社会的基盤が欠かせない。現在そして未来へと連なる普遍的な価値観を龍馬は敏感に察知していた。だからいつまでも若く、色褪せず、滅びることがない。